

## 勇敢さと技の見せどころ プロヴァンスの闘牛

われわれ日本人が闘牛からイメージするものは、血と砂と太陽、熱狂する観衆、華麗なるマタドールといったところだろうか。

しかし、これはあくまでもスペインの闘牛だ。

世界にはこれとまったく異なったスタイルの闘牛が数多くある。

ここで紹介するのは南フランス・プロヴァンス地方に伝わる「クルス・ア・ラ・コカルド」という「花飾り取り闘牛」。

これは闘牛士の勇気と技術が試されるもので、スペインの闘牛のような血と死はない。

闘牛士はラゼと呼ばれる半円形の競技場の中に立ち、牛の角の間に結びつけられたコカルド（赤いリボンの花飾り）をクロシエという猛禽類のかぎ爪のような形をした道具で取るうとする。

この闘牛に使われる牛は、ロレーヌ川下流のカマルグというデルタ地帯で闘牛のためにだけ育てられた独特のカマルグ牛である。

この先祖は遠くラスコーの先史時代の洞穴画に描かれている牛までさかのぼることができるといわれている。豎琴形なないとの中ぶくれ角を持ち、黒くちぢれた艶のある体毛に覆われ、獐猛じょうもうで

独立心が強く、闘争心が旺盛で、一部はスペイン牛とかけ合わせて一層この闘牛に向くように改良されている。

このカマルグの雄牛は馬よりも速く突進し、もつとすばやく向きを変えることができるといわれる。

したがってスペインの闘牛に比べるとはるかに闘牛士の危険度は高い。

だからこそ観衆は興奮し、みごとに花飾りを取ることに成功すると、一際高い拍手をおくるのだ。

闘いが終わると、牛はまた群れにもどされる。最後には必ずマタドールが牛を倒すスペインの闘牛には違和感を示す多くの日本人も、この闘牛士（ラゼトゥールという）のすばらしい技には称賛の声をあげるに違いない。

